君が来た日

都恵司

犬を飼うことに決まった。
　結局家族会議は紛糾し、母が叫び、父が泣いて、静香が転んだ。なぜあんなにも白熱した会議になったのかは今でもわからない。それでも決まった後は三人で固い握手をした。
　ペットショップからやってきたその犬はゴールデンレトリバーだった。会議で飼うのならばできるだけ賢い犬がいいと母が言ったから、ゴールデンレトリバーを飼うことになった。まだ小さい子犬で、きゅんきゅん泣きまくっていた。どこが賢いんだろうと静香は疑い深い目で子犬を見ていた。子犬はまあるいくりっとした瞳をこちらに向けて、舌を出したので笑っているように見えて静香はびっくりした。
　家に着いて、車から抱えて降りてひとまずケージに入れた。
　これから家族会議のセカンドステージが始まる。名前を決めるのだ。
「父さんはトカゲを飼うときのために名前を決めていたんだ」
　嫌な予感しかない台詞である。
「カゲトという名前なｎ」
「「却下」」
　母と静香によって即否定される。
「とかげのアナグラムで作った名前をなんで犬につけるのかしら。お父さんのセンスは理解できないわ。静香の名前だって、私が反対しなきゃ、しずしずとかそういう変な名前になっていたのよ」
　いまさらながら父のセンスに愕然とする静香であった。そんな話聞いたことない。
「ゴールデンレトリバーだから、ゴリバーとかはどうかしら」
　母のセンスにも愕然とした。私の名前は一体誰がつけたのだろうか。
「ね、ねえ。ちょっと関係ないことなんだけど。私の名前は誰がつけたの」
「おばあちゃんよ。せっかく私たちが考えた名前を、こんな名前は駄目だって言って。変えられちゃった」
　おばあちゃん、ありがとう！　静香は心の中で感謝した。それにしてもこのままではまともな名前に決まるはずもない。俯いた静香に気を使ったのか、両親は優しく訊ねた。
「静香は、どんな名前が良いと思うの？」
　突然聞かれて戸惑った。幾つか候補はあったけれど、これといってしっくりくるものがなかった。迷いながらも静香は答えた。
「れ、レバー？」
　静香の名付けセンスも大概であった。遺伝というものは確かに存在する。
　困ったのは子犬である。カゲトもゴリバーもレバーも全っ然可愛くない。名前のセンスが致命的な家族に迎えられ、子犬は困惑を隠せなかった。そわそわとケージの中を動き回った。しかし、無情にもその三つの中から選ぶことが決定した。三人で多数決をとることになった。
「それじゃあ、まず、カゲトが良い人」父が手を挙げる。

「ゴリバーが良い人」母が手を挙げる。
「レバーが良い人」静香が手を挙げた。
　埒が明かない。三人が違う意見を持ちながら多数決で決めようと言ったときから分かっていたことではあるが。
「「「うーん」」」
　名前にセンスのない三人は唸った。静香がひとつ提案をした。おばあちゃんに電話をして訊いてみたらどうかしら、と。
「そうね。訊いてみましょ」
　母が子機をとって短縮ボタンを押した。七コール目くらいで祖母が出た。すでに眠っていたところを起こしてしまったらしい。会議が白熱していつの間にか二十二時を過ぎていた。
「あのね、寝てた？　ごめんね。犬を飼うことにしたんだけど、名前が決まらなくってー。候補は、カゲト、ゴリバー、レバーなんだけど」
『……』
「聞いてる？」
『ええ聞いてますよ。少し呆れていただけです。まったくあなたたちは全然進歩していないじゃない。静香の名前を決めるときに言ったこと忘れたのかしら』
「覚えてるよ。名前はその人を表すものだから、慎重に決めなさい。言い易く覚え易く親しみ易くて素敵な名前、でしょ」
『じゃあ、ちゃんとその通りに決めなさい。そしたらきっとあなたたち三人でもいい名前が見つかると思うから』
「ありが」
　とう、と母が言う前に電話が切れた。祖母は熟睡していたらしい。会議が白熱したため気がつけばもう二十二時を回っていた。
「自分たちで考えなさいって。でも、今日はもう遅いから明日にしましょ」
「じゃあ、明日までに良い名前をそれぞれ考えてくること」
「おやすみなさい」
　この日は結局決まらなかった。子犬は三人に好きずきな名前で呼ばれた。
「カゲト、かわいいなぁ」「ゴリバー、ごはんよ」「レバー、行ってきます」
当然、ものすごく混乱していた。ぼくの名前は一体……。

　翌日、静香は学校に着いても上の空で、どんな名前が良いか考えていた。――言い易く覚え易く親しみやすく素敵な名前。
「おはよう、静香。どうしたの。ぼーっとして」
「おはよ。理乃ちゃん。昨日犬が家に来たんだよ。ゴールデンレトリバーですっごく可愛いの」
「良かったねえ。ごはんはよく食べる？」
「たくさん食べるよ。食べ終わっても足りないって顔でこっちを見るの。ついごはんを足しちゃうんだよね。ああ、でぶ犬になっちゃう」
「名前は決まったの？」
「まだ。だから、私は、レバーって呼んでる。お父さんはカゲト、お母さんはゴリバー」
「……」
「やっぱり変な名前かなぁ。可愛いと思うんだけど」
「レバーはねえ。日本語で肝臓だもの。内臓の名前はどうかと思う」
「そ、そうだったの。知らなかった」
「でも、カゲトもゴリバーも変よ」
「そうだよね。今日、帰ったら決めないと。早くしないとレバーが混乱し始めているから」
　理乃はそれを聞いて、一言、静香にアドバイスをした。

　そして、二度目の家族会議。
「父さん、やっぱりトカゲにちなんだ名前がいい。だから、リマキーという名前を推す。どうだこれなら言い易いし覚え易いぞ」
「だからどうしてトカゲにちなまなくちゃいけないの。お母さんは、ゴリバーからGをとってオリバーでどうかしら。言い易いし覚え易いし親しみやすい」
「私はね、クレバーが良いと思う。言い易いし覚え易いし親しみやすくて、この子が賢くなってほしいっていう希望を込めた素敵な名前でしょ」
　父と母が黙った。驚いた顔で静香を見ている。
「静香センスあるじゃない。私たちの子どもとは思えないわ」
「そうだなぁ。それで決まりだ」
「よろしくね。クレバー。賢くなってね」
　つやつやの毛並みをした頭を撫でながら静香は言った。
　かくして子犬の名前はクレバーに無事決まった。ただ静香が理乃に受けたアドバイスは「レバーに一文字足してみたら」というものだった。だから、静香が考えた他の候補の中には、「イレバー」や「サレバー」、「コレバー」、「ヌレバー」などやはり血は争えない名前がたくさんあったという。このことを両親はまだ知らない。

君が来た日

http://p.booklog.jp/book/33217

著者 : 都 恵司
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/123miki/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/33217

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/33217

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.